身延山大学京都特別公開講座（平成二十八年十二月二日）

日蓮学入門

三輪是法

京都特別公開講座「今なぜ日蓮学か」のトップバッターとして、「日蓮学入門」というタイトルで、講演させていただきます。まず、「日蓮学とは何か」ということについてお話ししたいと思います。

来年、平成二九年度から、身延山大学は従来の一学部二学科の体制（仏教学部仏教学科と福祉学科）を改め、一学部一学科三専攻になります。つまり、仏教学部仏教学科の中に日蓮学・仏教芸術・福祉学が設置されます。仏教学部仏教学科宗学コースは、日蓮学専攻になるわけです。では日蓮学とは一体どのような学問でしょうか。大学案内の説明を読ませていただくと、「法華経に基づく日蓮聖人の思想と生き方を学修し、日蓮仏教の核である菩薩行に基づいて、衆生救済という社会貢献を学究実践する学問」、端的に言えば、理論と実践を兼修する学問だといえます。逆に詳しくいいますと、現代に生きる私たちが日蓮聖人の仏教を理解するために、知識として必要な学問分野は、第一にインド・中国・日本に至る仏教史、第二に日本中世史、第三に仏教用語に関する基礎的知識、第四に法華経の教え、第五に中国・日本天台の教学、そして第六に日蓮聖人の御生涯に関する知識です。日蓮聖人の御遺文を拝読するためには、こうした知識を基礎として身につけておかなければならないでしょう。少し大風呂敷を広げた観がありますが、日蓮聖人の仏教を理解し、実践していくためには、総合的に学修する必要があるということです。

今回の講座では、日蓮聖人の仏教の核心である二つのテーマについてお話ししてまいりたいと思います。まず第一に、「なぜ日

蓮宗では『法華経』を信仰するのか」という問題、それから第二に「なぜお題目を唱えるのか」という問題についてです（本稿では第一の問題だけをとりあげています）。身延山大学では、この日蓮仏教の主要な二つのテーマについて、九十分の授業を前期十五回、後期十五回おこなって修得していくわけですが、今回は講義一回分の時間、九十分で説明していきたいと思います。本当に要点だけで説明してまいりますので、いささか雑駁になると思いますが、わかりやすさを心がけてまいります。よろしくお願いいたします。

一、正しい教えを知る

現在、日本仏教には多くの「宗派」が存在しています。宗派は日本中世から継承されているもので、日本仏教の特徴ともいえるでしょう。中学の日本史で習ったと思いますが、奈良時代の「南都六宗」は有名です。この頃の宗派は「学派」のことで、華厳宗・三論宗・法相宗・律宗・倶舎宗・成実宗といった宗派がありました。詳細を述べることはいたしませんが、この学派が一つの教団へと発展していく時代が訪れます。平安時代です。ここでは日本の仏教史を大きく捉えていきますが、平安時代は天台宗と真言宗の時代です。天台宗（本山は京都と滋賀にまたがる比叡山延暦寺です）は伝教大師最澄が開いた日本の仏教総合大学ともいわれており、後に多くの名僧を排出します。他方の真言宗の本山は、ご存じの通り、弘法大師空海が開いた和歌山県にある高野山金剛峯寺です。

ところで、仏教経典にはいくつかの分類方法があります。古来、「三蔵」といわれ、経典（経）・戒律書（律）・経典の解説書（論）の三種を含めて聖典とされています。南都六宗に当てはめますと、華厳宗は経、律宗は戒律、三論宗・法相宗・倶舎宗・成実宗は論の学派ということです。ここでインド仏教史を詳細に述べる時間がありませんが、やがて、経典に変化が見られるようになります。釈尊以降、教団内部で分裂が起こるわけですが、そうした分裂の過程で、さまざまな経典が編纂されていきます。

僧侶と呼ばれる出家者たちは、通常、自らブッダ＝覚者となるべく瞑想修行に励んでいるわけですが、出家者だけの閉鎖的な仏教ではなく、在家者たち、一般の人々に対しても教えを説き、救済していこうという機運が生まれます。このような僧侶たちが、自己の成仏だけを目的として修行している僧侶たちに対してつけた蔑称が「小乗」であり、それに対して自分たちのことを「大乗」と名乗りました。自分たちの仏教が正しく、優れているという差別化は他にもあります。例えば、「顕教と密教」「教家と禅家」など（後者が前者より優れているという自覚のもとに付けた名称です）があげられます。

仏教の分裂がもたらした区別化・差別化の歴史は、日本に多くの仏典をもたらすことになりました。つまり、日本にさまざまな宗派があるということは、さまざまな経典があるからだといえるでしょう。具体的に、平安時代から鎌倉時代末期までには、浄土宗・臨済宗・曹洞宗・浄土真宗など、現在活動している仏教宗派が誕生していきます。では、日蓮聖人が出家された時代はどのような宗派が活動していたのでしょうか。その答えは、五五歳の時（建治二年〈一二七六〉）に書かれた『報恩抄』に確認できます。

我が宗こそ一代の心はえたれえたれ等云云。所謂華厳宗の杜順・智儼・法蔵・澄観等、法相宗の玄奘・慈恩・智周・智昭等、三論宗の興皇・嘉祥等、真言宗の善無畏・金剛智・不空・弘法・慈覚・智証等、禅宗の達磨・慧可・慧能等、浄土宗の導綽・善導・懐感・源空等。此等の宗々みな本経本論によりて我も我も一切経をさとれり、仏意をきはめたりと云云。

【現代語訳】

大乗の七宗はいずれも自讃ばかりして、「私たちの宗こそ仏の一代の心を得たものである」などと主張している。すなわち、華厳宗の杜順・智儼・法蔵・澄観など、法相宗の玄奘・慈恩・智周・智昭など、三論宗の興皇・嘉祥など、真言宗の善無畏・金剛智・不空・弘法・慈覚・智証など、禅宗の達磨・慧可・慧能など、浄土宗の道綽・善導・懐感・源空などの人びとは、それぞれの宗の依りどころとする経典や論釈を根拠として、だれもかれもが「一切経を悟った、仏の本意を究めた」と言っ

ている。

日蓮聖人の時代に知られていた宗派は、南都六宗・天台宗・真言宗はもとより、禅宗と浄土宗も活動していました。その中で大乗仏教だけに焦点を当てられ、華厳宗・法相宗・三論宗・真言宗・禅宗・浄土宗に「釈尊の正しい教え（正法）」を求められたわけです。日蓮聖人が勉学を励んでいらっしゃった清澄寺は、当時天台宗の寺院でしたから、天台宗の教義は当然熟知されていたと思います。ただ、そこにとどまっていません。正法を求めて大乗仏教の各宗派が主張していることを勉強されたということです。その結果、それぞれが自分たちが一番だと主張している。これでは確かにどの宗派を信じていいのかわからなくなります。ではどうするのか。

いかんがせんと疑ところに、一の願を立。我れ八宗十宗に随はじ。天台大師の専ら経文を師として一代の勝劣をかんがへしがごとく、一切経を開きみるに、涅槃経と申経に云、依法不依人等云云。依法と申は一切経、不依人と申は仏を除き奉て外の普賢菩薩・文殊師利菩薩乃至上にあぐるところの諸人師なり。此経に又云、依了義経不依不了義経等云云。此経に指ところ了義経と申は法華経、不了義経と申は華厳経・大日経・涅槃経等の已今当の一切経なり。されば仏の遺言を信ずるならば、専ら法華経を明鏡として一切経の心をばしるべきか。随て法華経の文を開き奉れば、此法華経於諸経中最在其上等云云

【現代語訳】

そこで、それらの諸宗に従っていたのでは仏の御本意を知ることができないので、どのようにしたらよいかと思い悩み、一つの願を立てた。私は八宗、十宗には従わない。天台大師がもっぱら経文を師として一代聖教の勝劣を考えられたように、仏の教えに立脚して仏道を求めていこう。このように決意し一切経を開き見ると、『涅槃経』という経典に、「法に依り、人に依ってはならない」（如来性品）と説かれている。「法に依れ」とは仏の説かれた一切経に依れ、「人に依ってはならない」

とは仏以外の普賢菩薩・文殊師利菩薩などの菩薩や前にあげた諸の人に依ってはならない、ということである。また、同じく涅槃経に「了義経（真理を説き明かした経）に依り、不了義経（方便の教えを説いた経）に依ってはならない」（如来性品）と説かれている。この『涅槃経』が説いている了義経とは『法華経』、不了義経とは『華厳経』『大日経』『涅槃経』などの已今当（『法華経』の前後に説かれた経）の諸経である。したがって、仏の遺言（『涅槃経』）を信ずるならば、もっぱら『法華経』を明鏡として一切経の心を知るべきであろう。そこで『法華経』の文を開き見ると、「この『法華経』は諸経の中でもっとも上位にある」（薬王菩薩本事品）と説かれている。

日蓮聖人は「自分ですべての仏典を読み、正しい教えを知るしかない、それは、中国天台宗の開祖である天台大師智顗も行ったことなのだから」という結論に達します。これは気が遠くなるほど大変な勉強ではありますが、確実に「釈尊の正しい教え」を知ることができる方法です。なぜなら、中間に一切他の人々の解釈や意見が入らないからです。つまり、釈尊一人に従えばいいということになります。

日蓮聖人の回想から、二つのポイントを知ることができます。一つは「日蓮聖人はすべてのお経を読んで、正しい教えを知った」ということ、二つ目は「釈尊はご遺言（『涅槃経』）で、〈私の教えに従って、人に従うな〉と説かれ、〈方便を用いていない教えに従わなければならない〉ともおっしゃっている」ということです。特に二つ目のポイントは、日蓮聖人がとった方法の根拠になっており、翻ってその方法が間違っていなかったことを証明しています。その結果、『妙法蓮華経』という教えが釈尊が最も説きたかった教えであることを知ることになりました。では、日蓮聖人が「明鏡」と譬えられる『法華経』にはいったいどのような教えが説かれているのでしょうか。

二、経典には説かれた順序がある

資料に引用している『報恩抄』の後半部分を読んでみると、「已今当」という経文が見られます。これは『法華経』法師品第十、「已に説き、今説き、当に説かん」という経文のことで、釈尊の教えには時間経過によって違いがあることがわかります。この他にも、信解品第四の「長者窮子の喩え」では、父である長者が、自分のことを父親だと気づいていない窮子（貧しい子供）を、少しずつ気づかせていくという話が説かれますが、これも同じ意味を示す経文で、「釈尊の教えには順番がある」ということが示されています。その理由は、教えを聞く者たちが一様ではないためで、相手の能力に合わせて段階的に説いているからです。このことを三つ目のポイントとして押さえていきたいと思います。

『法華経』を読んでわかることは他にもあります。釈尊が残された言葉、「方便の教えに従ってはいけない」という戒めの言葉が示す「方便の教え」とは、どの経典のことをいうのでしょうか。資料にはあげていませんが、同じ法師品第十に「この経は方便の門を開いて真実の相を示したもう」という経文があります。つまり、『法華経』には真実の教えが説かれており、『法華経』が説かれる以前の教え、それから『法華経』以後の教えには釈尊の真意は示されていないということになります。ちなみに、「已説今説当説」の経文について、中国天台宗の開祖である天台大師智顗は『法華経』の経文を講義した際に（この講義録を『妙法蓮華経文句』、略して『法華文句』といいます）、『法華経』はこの三つの時間に当てはまらず、釈尊本意の最高の教えであることを読み取っています。

釈尊は仏となるための教えを、段階的に説いていったことがわかりました。当然、仏になるための教えは大変難しく、理解するためには困難を極めます。ですから、最初はわかりやすく、だんだんと難しくしていったと考えられます。ただ私たちのような煩悩の塊には、自分の修行を全うすることすら難しい。仏道修行者の段階には四つの段階があって、「四聖」といわれています。下から声聞・縁覚（辟支仏、独覚）・菩薩・仏という順に階段を上っていくのですが、最下位である声聞ですらある程度煩悩

を滅した修行者ですから、欲望まみれの現代社会において、なろうとしても簡単になれるものではありません。煩悩から離れ、自分の修行を達成した後に、やがて、その経験知を他者のために施していく段階、菩薩としての生き方が訪れます。『法華経』を読んでいると、この経典が「教菩薩法」であることがわかります。ブッダ＝覚者となる最終段階の教え、それが『法華経』なのです。これが四つ目のポイントです。

整理してみましょう。釈尊は相手の能力に合わせて段階的に教えを説かれた。したがって、経典の内容は簡単なもの（先ほども述べましたが、簡単といっても私たち煩悩の塊には実現困難な教えです）から、高度なものへと推移していく。その最終段階で説かれる教えが『法華経』である。『法華経』は釈尊が最も伝えたかった教えです。その証拠に釈尊は自らの意思で、相手の能力に合わせることなく教えを説かれるわけです（これを「無問自説」「随自意」といい、弟子たちの質問に答える形式を「随問而説」、相手に合わせて説くことを「随他意」といいます）。

すべての経典を読破し、内容によって、説かれた順番を考えて整理する。中国を経由して伝播してきた仏典は、東アジアに多くの漢訳経典をもたらしました。漢訳が進められた中国でも、最も正しい教えはどの経典に説かれているのか、ということを考えたようです。その結果、経典の整理が行われました。この整理のことを「教相判釈（略して教判）」といいます。天台大師智顗によると、当時十種類の教判（これを天台大師は「南三北七」と呼んでいます）があったということ

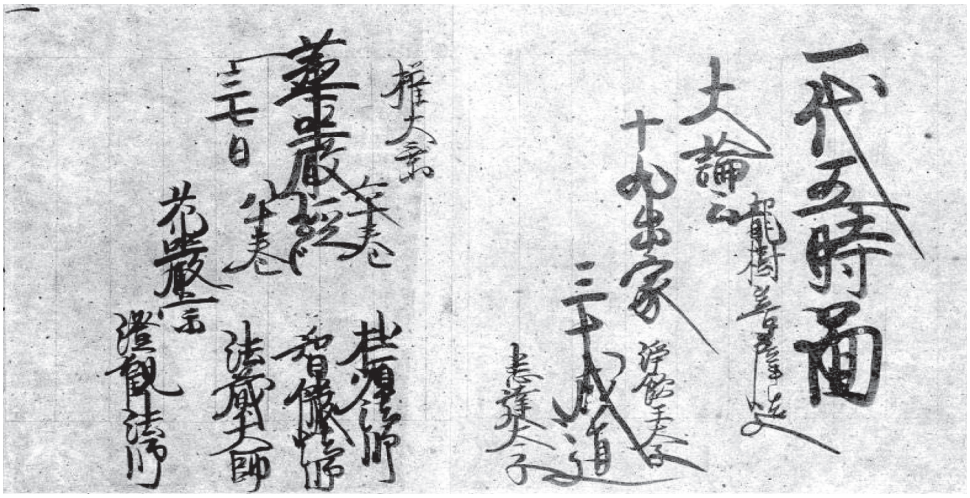

写真１

です。それに対して智顗は自らも教判理論を立てました。その名称が「五時八教判」です。まず「五時」についていえば、釈尊が悟りを開いてから後の時間を五つに分け、経典をその時間に配置しました。それぞれの時間の名称は、ほぼ経典に基づいており、華厳時・阿含時・方等時・般若時・法華涅槃時となっています。「八教」は、教えの内容（これを「化法の四教」といいます）、教えが説かれる形式（これを「化儀の四教」といいます）の視点からそれぞれ四つづつに分類したものが「八教」で、前者が蔵教・通教・別教・円教、後者が頓教・漸教・秘密不定教・顕露不定教と呼ばれています。八教について詳細に述べませんが、天台大師智顗の五時判に基づいて、日蓮聖人が五時を図式化されたものが『一代五時図』『一代五時鶏図』などです。（写真1・2）

(1)『一代五時図』
（御真蹟一〇紙中山法華経寺蔵、文永五年〈一二六八〉頃、日蓮聖人四七歳）

(2)『一代五時鶏図』定本第三巻　図録二〇
（建治元年〈一二七五〉、五四歳）

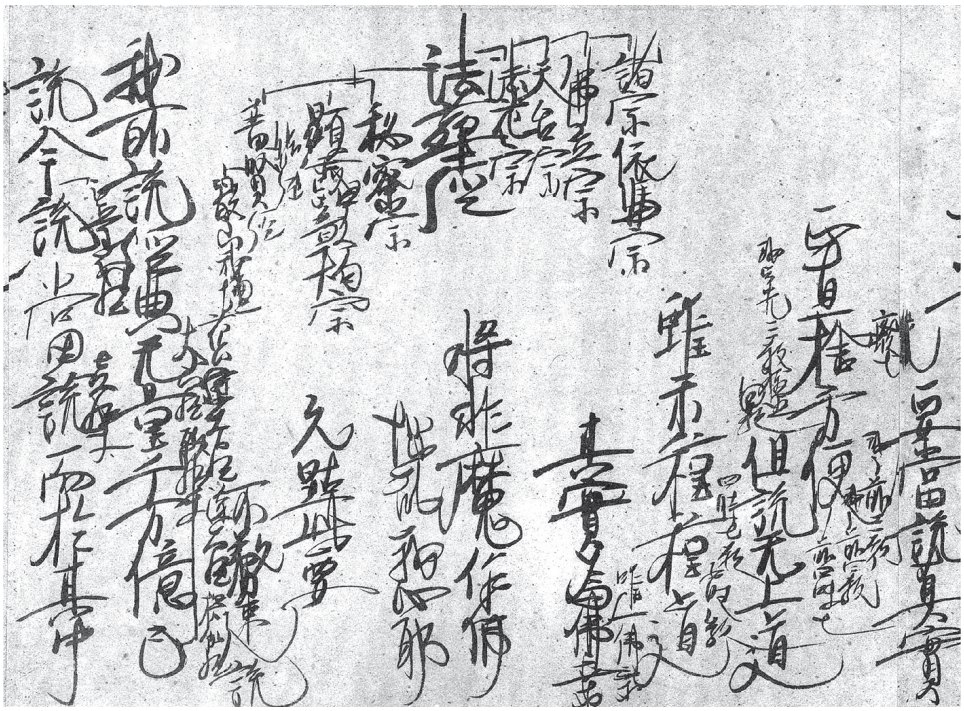

写真２

もちろん、天台大師の時代と日蓮聖人の時代では年数に六百年以上の開きがありますから、各時間に配置されている経典に違いが見られます。とりわけ方等時に分類されている経典は他の時間、華厳・阿含・般若・法華涅槃という経典の名称で示された時間に入らないさまざまな経典が配置されています。日蓮聖人の場合、奈良・平安時代以降の日本の各宗派が研究、あるいは信仰していた経典がすべて書き入れられています。具体的には『無量寿経』『観無量寿経』『阿弥陀経』の浄土三部経、『大日経』『金剛頂経』といった密教経典などです。写真2の『一代五時鶏図』を確認すると、『法華経』という名称の周辺に、『法華経』こそが釈尊の正しい教えであることを証明する経文が多数書き込まれています。これらの経文は『法華経』から日蓮聖人が抜粋されたものですが、元をたどれば、釈尊ご自身が語られた訳ですから、間違いないということになるわけです。それでは、具体的に『法華経』だけに説かれ、他の経典には見られない優れた教えとはどのようなものでしょうか。

三、『法華経』と他の経典の違い

天台大師智顗は、「妙法蓮華経」という題目の五文字を注釈するために、十巻に渡る膨大な講義録を残しました。これを『妙法蓮華経玄義』（『法華玄義』と略します）といいます。天台大師は『法華経』と他の経典の違いについて三点指摘しました。それを「三種教相」といいます。第一に『法華経』は教えと聞く人の能力が融通し合っている（根性融不融相）、第二に『法華経』は釈尊がいつから私たち衆生を導き始め、成仏させるのかを明示している（化道始終不始終相）、第三に『法華経』ははじめて久遠の釈尊と遠い昔から教え導いてきた弟子たちを明らかにした（師弟遠近不遠近相）、というものです。これら三点は、それぞれ『法華経』の各章に説かれている内容で、第一点目は信解品第四、第二は化城喩品第七、そして第三は如来寿量品第十六にあります。

さらに時代が下って、中国天台宗第六祖の妙楽大師湛然という方が、天台大師の『法華文句』に注釈を加え、『妙法蓮華経文句

記』（『法華文句記』と略します）を著しました。その中で妙楽大師は、『法華経』と他の経典の違いを二十項目（これを「十双歎」といいます）指摘しました。すべてについて説明しませんが、二十項目の中で、天台大師が指摘する三項目と共通し、日蓮聖人もご指摘になる項目についてあげてみると、次のようになります。

① 仏の種を失った修行者、声聞と縁覚が未来に成仏できることが確約される。
（方便品第二～授学無学人記品第九）＝二乗作仏

② 釈尊は遠い昔に仏となり、私たちが暮らす娑婆世界でずっと教えを説いている。仏となる前の菩薩としての修行期間はその倍以上である。（如来寿量品第十六）＝久遠実成

③ 提婆達多成仏：釈尊を傷つけ、教団を破壊しようとした悪人・提婆達多が仏になれる。（提婆達多品第十二）＝悪人成仏

④ 龍王の娘である龍女が仏になった。（提婆達多品第十二）＝龍女成仏・女人成仏

⑤ 釈尊のお経には説かれる順番があるが、過去・現在・未来の教えの中で、『法華経』こそが釈尊の真意が述べられている最も大切な教えである。（法師品第十）＝已説今説当説

⑥ 釈尊が娑婆世界に住む私たち衆生を導き続けている時間の永さを表す。（化城喩品第七）＝三千塵点劫

⑦ 釈尊が覚りを得てから経過した時間と娑婆世界に住む私たち衆生と関係し続けている時間の永さを表す。（如来寿量品第十六）＝五百億塵点劫

それぞれについて見ていきましょう。①は「二乗に近記を与える」という文で記されていますが、専門用語で「二乗作仏」といい、二乗とは先にも述べました声聞と縁覚という修行段階の人々を指します。正確には声聞乗と縁覚乗です。この二種の人々は、『法華経』以前に説かれた経典では仏になれないといわれていました。なぜならば、自分が悟るために一所懸命で、自己満足して増上慢になっていたからです。その二乗が『法華経』に至ってはじめて改心して、釈尊から未来成仏の確約を得るのです（これを授記といいます）。

②は「如来の遠本を開く」、釈尊がみずからの「久遠実成」を顕かにしたことをいいます。遠い昔に成仏してずっと存在しつづけている釈尊こそが本当の仏であり、他の仏は釈尊が姿・名前を変えて説いた仮の仏であることが示されます。

原文で「釈迦は五逆の調達を指して本師となす」と書かれている③は、提婆達多が成仏できることを示しています。つまり、『法華経』は現世において悪人であっても成仏できる教えだということです。提婆達多は釈尊のいとこでしたが、仏である釈尊に対しけがを負わせ（出仏身血といいます）、釈尊と弟子たちの絆を断ち（破和合僧といいます）、修行僧を殺してしまいました（殺阿羅漢といいます）。この罪を「三逆罪」といって、一度は出家した提婆達多でしたが、決して仏にはなれないといわれていました。それが『法華経』では、前世で釈尊の師であったために、成仏できると説かれます。

④も同じ提婆達多品の教えです。妙楽大師の文では「文殊は八歳の龍女をもって所化となす」と説かれています。つまり、『法華経』は畜生の成仏、女人の成仏を可能にする教えだということです。日蓮聖人は『開目抄』に、龍女成仏が説かれたことで、末法の世のすべての女性が成仏できる道が開かれたと書かれています。

⑤については、先に述べましたように『法華経』法師品第十の経文で、釈尊の教えには順番があり、聴く側の能力が向上するにつれて難しくなると説明したところです。妙楽大師の文では「已今当の説は一代に絶えたる所なり」と示されています。天台教学に基づいて補足説明を加えれば、已に説かれた教えが『法華経』より前に配置されたさまざまな経典、今説かれているのは『法華経』のイントロダクション（これを「開経」と呼びます）と考えられている『無量義経』、これから説かれる教えが『涅槃経』になります。つまり、大乗小乗すべての経典の中で、釈尊の真意のみを説いている経典は唯一『法華経』だけということなのです。

妙楽大師が二十項目あげる中で、最後の二つが⑥と⑦です。妙楽大師の文ではそれぞれ「迹化には三千の墨点を挙ぐ」「本成をば五百の微塵に喩へたり」と示されています。⑥は化城喩品第七の内容です。「三千の墨点」というのは、釈尊が私たちが生活をするこの現実の世界（娑婆世界といいます）で、私たちに仏の道を説き始めたはるか昔に遡る時間の長さを表すために用いられ

た喩えです。仏典で説明される世界と、私たちが現在知っている地球や宇宙という世界とではその構造が異なっていることに注意しなければいけません。仏教で「世界」という場合、須弥山という山を中心として周囲に九つの山と八つの海を含めた世界のことで、須弥山の上下にも世界が広がっています。こうした世界が三千あるということを「三千大千世界」といいます。その全世界をすりつぶして微塵にします。すりつぶして墨となった一粒を持って東に向かって歩いて行き、千の世界を過ぎたらそれを置く。この行動を繰り返して、すりつぶした墨がすべて無くなるまでの時間が三千塵点劫といいます。如来寿量品第十六に出てくる⑦の「五百の微塵」という時間は、化城喩品の三千塵点劫という数字を「五百千万億那由佗阿僧祇」倍した数です。ちょっと想像できませんが、釈尊の導きが始まる更にはるか昔に、この娑婆世界の教主として存在していたということになります。それほど昔から菩薩の修行をし、悟りを開き、私たちを「常説法教化」されているということです。

『法華経』が他の経典と異なる点、『法華経』だけに説かれる教えを七項目説明してきましたが、日蓮聖人はこの中で最後の二つを「三五の二法」という言葉で表現して、重要視されています。

四、日蓮聖人の教判

今までお話ししてきたこと、他の経典と『法華経』との違いは、天台大師、妙楽大師の時代から伝えられてきたことです。言い換えると、理論的に提示できる『法華経』が勝れた教えである根拠ということになります。日蓮聖人はこうした異なる教えによって『法華経』が他の経典より優れていることを証明されていますが、もう一つ『法華経』の教説が現実世界に現象として起っているという証拠、つまり、ご自身の体験に基づいて『法華経』の真実性を証明し、『法華経』の必要性を示されているということが日蓮聖人独自の証明方法といえるでしょう。佐渡流罪中に書かれた『開目抄』（文永九年〈一二七二〉、五一歳）には次のようにあります。

此等の経文（華厳経や涅槃経などの八つのお経文）を法華経の已今当・六難九易に相対すれば、月に星をならべ、九山に須弥を合たるにこたり。（中略）法華経の六難九易を弁れば一切経よまざるにしたがうべし。（括弧内筆者）

【現代語訳】

以上、『華厳経』や『涅槃経』などの八つの経文を挙げたが、これらの経文を『法華経』「法師品」の已・今・当の三説超過の経文や「見宝塔品」の六難九易の経文と比べてみると、あたかも月と星がならんでいるようなもの。須弥山の金輪の上にある九つの山のそれぞれが須弥山に拮抗しようとしているようなもの（法華経が諸経に勝れていることは明白である）。法華経の六難九易について深い理解があれば、たとえ仏教経典のすべてを熟読しなくても、法華経と諸経との勝劣は自ら判明するに違いない。

「法師品」の已・今・当についてはすでに説明しました。ここでは「見宝塔品」の偈文に説かれる「六難九易」が示されています。六難九易は、釈尊が入滅した後に、『法華経』を説くことがどれほど困難なのかを明らかにしています。六難は『法華経』の教えを弘めることの困難性、それと比較して易しい行動を九種説いているのですが、この九易ですら通常では全く実現不可能な行為があげられています。具体的には、山を一つ投げるとか、足の指で世界を動かしてそれを投げるといった行為であり、『法華経』を弘めるより、そうした行為のほうがはるかに易しいというわけです。理解しやすく、受け入れられやすい経典が優れているのか、それとも難しく、受け入れにくい教えが優れているのかということを考えたとき、悟りへの道の険しさを思えば、前者より後者が一層上位に位置づけられる教えであることが理解できます。さらに、この六難九易の経文が真実性を持つためには、実際に『法華経』を布教し、その困難性を体験として知らなければならない。つまり、日蓮聖人が身をもってこの経文の真実性を示しているということも特徴的なことです。ですから、実際に布教して釈尊が示したとおり「六難九易」という情況が理解できれば、それ以上の修学はいらない、すべての経典を読む必要はない、とまで言い切られているのです。

その他にも、次のような経文が『報恩抄』（建治二年〈一二七六〉、五五歳）に示されています。

法華経の法師品に釈迦如来金口の誠言をもて五十余年の一切経の勝劣を定て云、我所説経典無量千万億　已説今説当説。而於其中此法華経最為難信難解等云云。此経文は但釈迦如来一仏の説なりとも、等覚已下は仰て信ずべき上、多宝仏東方より来て真実なりと証明し、十方の諸仏集て釈迦仏と同広長舌を梵天に付給て後各々国々へ還らせ給ぬ。

【現代語訳】

法華経の法師品には、釈迦如来がまぎれもなく自らの尊いお口で真実のお言葉を述べられ、五十余年間に説き示されたすべての教えの勝劣を定めて、「私が説いた経典は限りなく多いが、已に説いた爾前の諸経（法華経以前に説いた四十余年の諸経）、今説いた無量義経、まさに説こうとしている涅槃経の中で、この法華経は最勝の教えであるためにもっとも信じ難く理解し難い」と説かれている。

同じように「法師品」の已今当説の経文が引用されていますが、さらにそれに続く経文、「法華経最為難信難解」も引かれています。先ほどの六難九易と同じ意味を持っていますが、信じがたく理解しがたい教えであるがゆえに、この『法華経』は釈尊一代で説かれた教えの中で最も重要な教えであるということがわかります。『法華経』が「難信難解」である理由は、釈尊が悟りの境地を相手の能力に合わせて説き分けるのではなく、自らの意志で最も伝えたい教えを説いているからです。ただし、日蓮聖人は釈尊が「難信難解」とおっしゃっているからそれで終わりだとはいいません。信じることができるようにさらに経文を引用し、私たちを導いていきます。その経文が「見宝塔品」の多宝如来の証明と、「如来神力品」で説かれる十方分身仏の舌相です。多宝如来は、『法華経』が説かれるならば、いついかなる場所にも赴いて、教説が真実であることを証明する仏です。さらに、十方分身仏の舌は梵天の世界、天界にまで延び、この教えが真実であることを証明しているということです。

「難信難解」の『法華経』は、幾重にもわたって釈尊の最も伝えたかった教えであることを証明しようとしていますが、その真実性を証明する確実な論拠は、現実に経典で説かれる出来事が起こることです。日蓮聖人は、『法華経』と他の経典との違いを指摘し、『法華経』に説かれる真実性を証明する経文をあげ、さらに釈尊の予言（これを未来記といいます）である経文が自らの経験を通して実現しているという三つの根拠を示すことで、『法華経』こそが釈尊の真意であることを証明していきます。三番目の根拠は、日蓮聖人が『法華経』の世界の中に生きていなければ不可能です。『法華経』の時間と空間に生きていること、娑婆世界の無限の時を生きているという自覚です。それは、釈尊一代の教えをすべて読み、本意を知ることで、さらに仏道に身を投じることで生まれる自覚です。自覚は信仰を前提とし、経験が自覚に至らしめる。日蓮聖人は『寺泊御書』（文永八年〈一二七一〉、五〇歳）で次のように説かれます。

法華経三世説法儀式也。過去不軽品今勧持品。今勧持品過去不軽品也。今勧持品未来可為不軽品。其時日蓮即可為不軽菩薩。

【現代語訳】

法華経の方便品第二によれば、過去・現在・未来の三世の諸仏は、まず権教を説いて人々を誘引し、最後に法華経を説くことになっている。従って説法の順序や布教の方法については、どの仏であってもその儀式の形式は法華経と変わりはない。このため過去世の威音王仏の時の不軽品第二十は、今の釈尊の勧持品第十三の教えとなり、同時に今の釈尊の勧持品の教えは、未来の仏の時は過去の不軽品となって、正法を布教する手本となる。不軽品に登場する不軽菩薩は、非難する者・信奉する者すべてに等しく布教して、時には刀・杖で打ちつけられ瓦や石を投げられたりする迫害を受けたが、今の釈尊の勧持品が、未来の世において、過去の不軽品として仰がれるようになれば、日蓮は過去の不軽菩薩として、正法を布教することの手本となるであろう。

度重なる法難を経験する中で、日蓮聖人は実在する法華経弘通を阻む人々が「勧持品」の経文（「勧持品」では、邪魔する人々を三種の増上慢として示されています）と一致していることを確信します。『法華経』の時間でいえば、「勧持品」は釈尊が入滅した後の世界、未来世のことですが、過去世の話も説かれます。それが「常不軽菩薩品」で、釈尊は過去世の自分の姿を示すことで、『法華経』を弘める手立てを伝えます。『法華経』は過去・現在・未来の三世で、同じように布教困難な教えだと説かれています。それを「勧持品」と「常不軽菩薩品」の時間の関係でみれば、「勧持品」の世界が現実化している日蓮聖人の時代、そこから自分がいなくなった滅後の未来を観たときに、未来の人々は日蓮を常不軽菩薩と知るのだ、という強い自覚が確認できます。まさに『法華経』の世界に生きる日蓮聖人が、自らの度重なる法難によって、『法華経』の真実性、必要性を証明しているのです。

五、本当の教主

もう一つ重要な理由があります。それは先にも述べました、釈尊が示された二つの時間の長さです。一つが化城喩品の三千塵点劫、もう一つが如来寿量品の五百億塵点劫でした。この二つの時間が示していることは、釈尊が娑婆世界で生活する私たちを遠い昔から導き続けているということ、しかも、釈尊は久遠の命を持っているために、過去から未来までも私たちとこの娑婆世界で常に関わり続ける教主だということです。大乗仏典には多くの仏が説かれていますが、五百億塵点劫が説かれる如来寿量品で、これらの仏を一つにまとめる言葉が説かれています。釈尊は、久遠の時間の中で説いてきた経典が、すべて生きとし生けるものを救うためにあることを明らかにして、「或いは己身を説き、或いは他身を説き、或いは己身を示し、或いは他身を示し、或いは己事を示し、或いは他事を示」してきたと述べられています（これを六或示現といいます）。久遠の釈尊のこの言葉によって、阿弥陀仏や毘盧遮那仏などの仏が、すべて釈尊だったことが明らかにされます。つまり、私たちを導く教主はただ釈尊一人

だけであるということになります。

日蓮聖人は釈尊に三つの徳、私たちのとっての役割を観ています。それは『法華経』「譬喩品」に説かれ、日蓮聖人は『八宗違目鈔』（文永九年〈一二七二〉、五一歳）で次のように解釈されています。

法華経第二云　今此三界皆是我有［主国王世尊也］其中衆生悉是吾子［親父也］而今此処多諸患難唯我一人［導師］能為救護。

【現代語訳】

法華経第二巻の譬喩品第三には「いまこの世界はすべて私が所有しているのである」とは、釈尊が我々の主人の徳・国王の徳・世の中で最も尊いものである世尊の徳のあることを説いたものであり、「その中に生きる衆生はすべて私の中である」とは、親の徳のことであり、「しかもここには多くのさしさわりがあるが、私こそがそれを救い守る」とは師の徳を説いたものである。

釈尊は主であり、父親であり、私たちを導く師であるということです。この主・師・親を「三徳」と呼び、久遠の仏・釈尊が私たちと日常的存在として関係し続けていることを見いだしています。言い換えれば、他の経典で説かれる仏の中で、釈尊が最も身近な存在で、しかも長い時間私たちとともにいる仏であるということです。

こうして、『法華経』と他の経典との関係、あるいは違いを、その教えを説いた教主に基づいて日蓮聖人は明確化し、『法華経』こそが釈尊の最も重要な経典であり、釈尊こそが私たちの教主であると明らかにしました。ただし『法華経』が必要とされる、もう一つ大切な内容があります。『法華経』は釈尊自らが入滅した後の時代を想定して説かれた教えであるという点です。『法華経』の中には、随所に釈尊入滅後の時代について限定的に説かれています。その時代は「末法」「後五百歳」という名称で示さ

れ、仏教が衰退していく時代です。釈尊はご自分が入滅した後の時代を予測されました。これは、人間というものをよく知っている釈尊だからこそできることです。この予言は、仏教が衰退していく過程を三段階で説明した「三時説」と、五段階で示した「五五百歳説」の二説あります。それを箇条書きにすると次のようになります。

① 三時説：正法・像法・末法

正法（千年）……お釈迦様の教えが弘まり（教）、修行が行われ（行）、覚りが得られる（証）時代

像法（千年）……教と行はあるが、証がない時代

末法（万年）……教だけが残っている時代

② 五五百歳説

解脱堅固（五百年）……仏教が盛んで、解脱（覚り）するものが多い時代

禅定堅固（五百年）……心安らかな状態を保つ（禅定）者が多い時代

多聞堅固（五百年）……修行する者が減り、教えを聴く者が残る時代

造寺堅固（五百年）……寺を建てたり塔を建てることに熱心な時代

闘諍堅固（五百年）……人々の心が乱れ、争いが絶えない時代

また、『法華経』には次のように説かれています。

●「安楽行品」

如来滅後。於末法中。欲説是経。応住安楽行。

●「分別功徳品」

悪世末法時　能持是経者

●「薬王菩薩本事品」

・若如来滅後。後五百歳中。
・我滅度後。後五百歳中。広宣流布。於閻浮提。無令断絶。

●「普賢菩薩勧発品」

・爾時普賢菩薩。白仏言世尊。於後五百歳。濁悪世中。其有受持。是経典者。我当守護。
・後五百歳。濁悪世中。
・如来滅後。後五百歳。若有人。見受持読誦。法華経者。応作是念。

つまり、『法華経』は内容もさることながら、釈尊入滅後に訪れる「末法」「後五百歳」という時代が要請する釈尊の教えであるということなのです。